

令和7年度 島根県立大学 入試対策 模擬試験 8

国際関係学部 国際関係学科 国際関係コース テーマ：環境問題と国際的な「正義」の相克

【問題】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

地球温暖化をはじめとする環境問題は、今や人類共通の脅威となっています。この問題に対処するため、国際社会では温室効果ガスの排出規制など、様々な「力の体系（ルール）」が作られてきました。しかし、これらのルールがスムーズに運用されない背景には、国家間の深刻な「正義」の対立が存在します。

先進国は、地球全体の未来のために、全ての国が平等に排出量を削減すべきだと主張します。これは「環境保護」という「価値の体系」に基づいた正義です。一方、発展途上国は、これまでの温暖化の責任は産業革命以降に大量のガスを出してきた先進国にあると反論します。彼らにとっての最優先事項は、今の貧困から脱するための経済成長という「利益の体系」であり、自分たちだけに厳しい規制を課されることは「不公正」な正義だと映るのです。

このような対立が起きるたびに、私たちはしばしば「環境を破壊する国や企業が悪い」という単純な図式に逃げ込んでしまいがちです。しかし、高坂正堯が指摘するように、特定の「悪役」を見つけ出して批判することで満足することは、**(a)「知的な怠惰」**に他なりません。その背後にある、それぞれの国が抱える生存をかけた利益や、歴史的に形成された正義の相違という複雑な現実を分析することを放棄しているからです。

私たちは今、一つの大きな**(b)「相克（ジレンマ）」**の中にいます。それは「地球の未来を守るために環境を保護しようとするれば、途上国の豊かな暮らしへの希望（経済成長）を奪いかねず、逆に開発を優先すれば、人類全体の生存基盤が崩壊してしまう」という不都合な関係です。どちらの正義も一理あり、簡単に「こちらが正しい」と言い切ることはできません。

環境問題を解決するためには、他国の不備を責めるのではなく、まずは「自分自身の生活」を問い直す必要があります。他国の環境破壊や資源争いは、実は私たちの便利な暮らしを支えている「消費の鏡」でもあります。他国の苦境を自分たちのあり方を知るための**(c)「鏡」**として捉え、自分たちが信じている「豊かさ」という自画像を描き直すこと。こうした終わりのない知的労働こそが、異なる正義が並立する世界において、新たな共生を可能にする道なのです。

【設問】

問1 下線部(a)について、筆者はなぜ「知的な怠惰」という言葉を使っているのか。その理由を、文章中の言葉を用いて150字以内で説明しなさい。

問2 下線部(b)について、筆者が述べる「相克（ジレンマ）」とはどのような状況を指すか。文章全体の内容を踏まえて、200字以内で説明しなさい。

問3 下線部(c)に関連して、私たちは地球規模の環境問題に対して、どのような姿勢で向き合うべきだと考えますか。本文で述べられている「自画像を描き直す」という考え方を踏まえ、あなたのこれまでの経験や学習内容（修学旅行、ボランティア、節電・節水の経験など）を具体的に一つ挙げながら、600字以内で述べなさい。